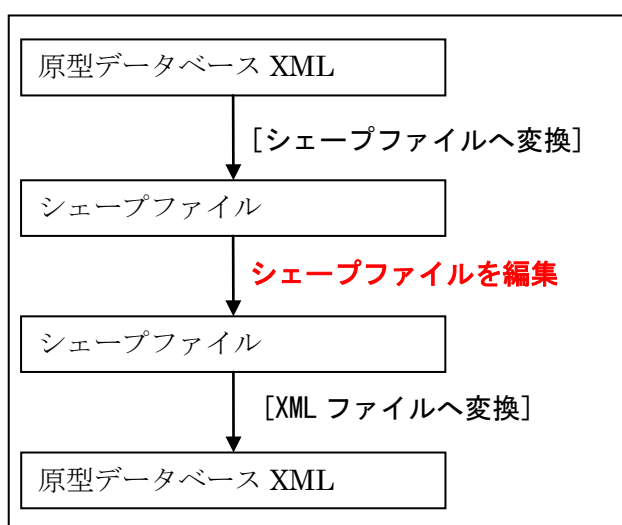


1. XML ファイルへ変換

新メニュー[基盤地図情報]-[XML ファイルへ変換]を追加しました。以下、説明書からの抜粋です。

上記メニュー[シェープファイルへ変換]で基盤地図情報原形データベース XML ファイルから変換したシェープファイルを XML ファイルへ戻します。

新規に XML ファイルを作成する地区と、既に作成されている地区との整合性をとるため、例えば重複している地物を既存の XML ファイルから削除するなど、既存の XML ファイルを変更したい場合に使用できます。



上記の変換では、基本的に XML ファイルの要素の内容が保持できます。メニュー[シェープファイルへ変換]では、XML の要素の内容をそのままシェープの属性に変換します。例えば、「地物 ID」はシェープファイルでは「fgoid:10-00200-7-123-146518」と記録されています。メニュー[XML ファイルへ変換]では、シェープファイルに記録されている属性値をそのまま XML の要素の内容としますので、同じ「地物 ID」が保持されることになります。もし、シェープファイルの編集で、ある地物が削除された場合、その地物の「地物 ID」は変換された XML に現れることはありません。

入力フォルダ

変換したいシェープファイルを置いておきます。シェープファイル名は「地名+.shp」です。

平面直角座標系

現在、シェープファイルの座標は平面直角座標系のみに対応しています。メニュー[シェープファイルへ変換]では、平面直角座標系のシェープファイルを作成してください。

出力フォルダ

基盤地図情報原型データベースの XML ファイルを作成するフォルダです。

市区町村名

作成する XML ファイル名の先頭につける市区町村名です。

XML ファイルのサイズ

XML ファイル保存時に、指定されたサイズを超える場合、ファイルを分割します。シェープに変換する前の XML ファイルが複数の場合、分割の判定が異なれば、それぞれの XML ファイルに格納される地物の数が異なってきます。

GI 要素の属性

XML ファイルの要素「GI」の内容を指定します。基盤地図情報整備の時期によって、この部分が異なりますから、ダイアログで指定します。「xmlns:xsi」「xmlns:xlink」など変更がない属性はダイアログでしてする必要はありません。

exchangeMetaData

要素「exchangeMataData」に記録する情報を指定します。

要素[proxy]を出力する

ON の場合、行政区画・行政区画界線・町字界線・街区域・街区線・水域・水涯線・海岸線・建築物・建築物の外周線・道路域の線(Curve)あるいは(Surface)に要素「proxy」を付加します。

このメニューで XML に変換できるのは次の地物です。

	地物	変換
1	測量の基準点	
2	街区点	
3	整備作業用実測点	
4	DEM 区画	
5	標高点	○
6	等高線	○
7	行政区画	○
8	行政区画界線	○
9	行政区画代表点	○
10	町字界線	○
11	町字の代表点	○
12	街区域	○
13	街区線	○
14	街区の代表点	○
15	水域	○
16	水涯線	○
17	海岸線	○
18	河川堤防表法肩法線	○
19	河川区域界線	○
20	建築物	○
21	建築物の外周線	○
22	道路縁	○
23	道路構成線	○
24	道路域分割線	○
25	道路域	○
26	道路区域界線	○
27	軌道の中心線	○
28	検証点	
29	標定点	
30	図葉調整 TIN ポリゴン	

シェープファイルの属性の名称に対して、XML の要素のタグを対応させています。つまり、シェープファイルに以下の属性名があり、属性値が空白でなければ、対応する要素を XML に出力します。シェープファイルの属性名はシフト JIS で、カタカナ・漢字は全角、アルファベットは半角です。この表で、「/」は子要素を示しています。この対応関係は [シェープファイルへ変換] で使用する「FGDCDB2SHP.csv」の設定と同じです。

シェープファイルの属性名	XML ファイルの要素のタグ
地物 ID	地物 ID
情報レベル	出典地図情報レベル
編集フラグ	編集実施フラグ
可視フラグ	可視フラグ
存在期間自	存在期間_自/position/date8601
整備完了日	整備完了日/position/date8601
作業番号	整備作業番号
出典メタ	出典メタデータ
基盤メタ	基盤地図情報メタデータ
出典元キー	出典元キー情報
分類コード	DM 分類コード
図形区分	DM 図形区分
メッシュ	所属三次メッシュ
種別	種別
名称	名称
点名	点名

標高値	標高値
行政コード	行政コード
街区符号	街区符号
管理主体	管理主体

各地物に割り当てられるユニークな番号は、属性「地物 ID」から取得します。「地物 ID」の最後のハイフンの後の数字をユニーク番号とします。例えば、シェープファイル属性「地物 ID」の値が「fgoid:10-00200-7-123-146518」の場合、「146518」がユニーク番号になります。

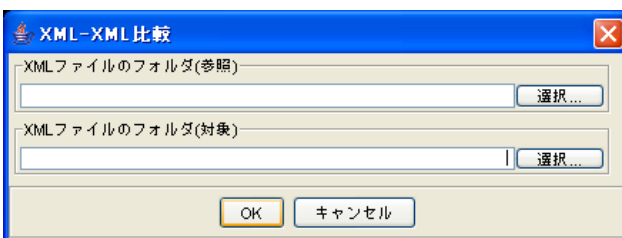
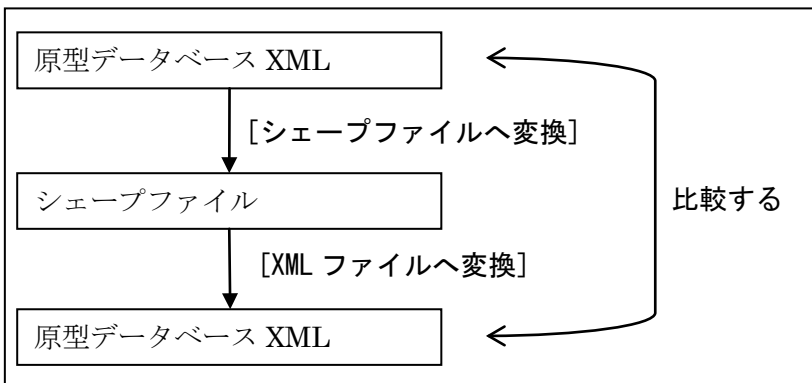
ダイアログで「基盤地図情報メタデータ ID」を指定しますが、これは要素「exchangeMetaData」にのみ使用します。各地物の要素「基盤地図情報メタデータ」は、シェープファイルの属性「基盤メタ」を参照します。

要素「出典メタデータ」や「基盤地図情報メタデータ」の内容は「fmdid:7-202」などとなっています。メニュー「シェープファイルへ変換」では、シェープファイルの属性値にそのまま「fmdid:」を含んで「fmdid:7-202」と記録しています。この「XML へ変換」では、シェープファイルの属性値をそのまま要素の内容としていますので、XML ファイルにも全く同じ内容「fmdid:7-202」を出力します。つまり、一連の変換で「fmdid:」を削除したり、付加したりしていません。

2. XML-XML 比較

新メニュー[基盤地図情報・XML-XML 比較]を追加しました。以下、説明書からの抜粋です。

上記メニュー[XML へ変換]で元の XML とシェープから変換した XML が同じかを確認するためのツールです。



XML ファイルのフォルダ(参照)

元の基盤地図情報原型データベースの XML ファイルのフォルダを指定します。

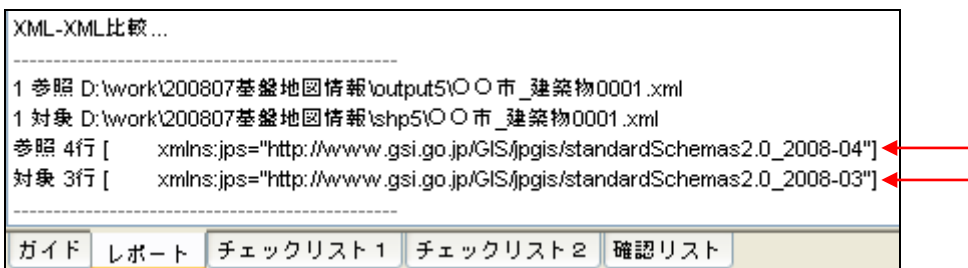
XML ファイルのフォルダ(対象)

メニュー[シェープファイルへ変換]で作成したシェープファイルを[XML ファイルへ変換]で作成した XML ファイルの

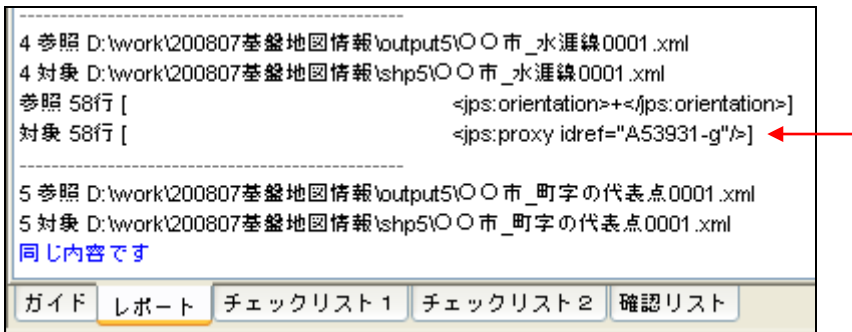
フォルダを指定します。

両方のフォルダで、同じ名前の XML ファイルを比較します。それぞれのファイルを一行ずつ取り出して、文字列が異なれば、その旨を[レポート]パネルに表示して、比較を終了します。つまり、一番最初に違う行があれば、その行を示し、後の行についての比較は起こりません。改行だけの空白行があれば、その行はとばします。また、要素のタグの前に半角スペースやタブがある場合に対応するため、各行の文字列から半角スペースとタブを除いた文字列で比較します。

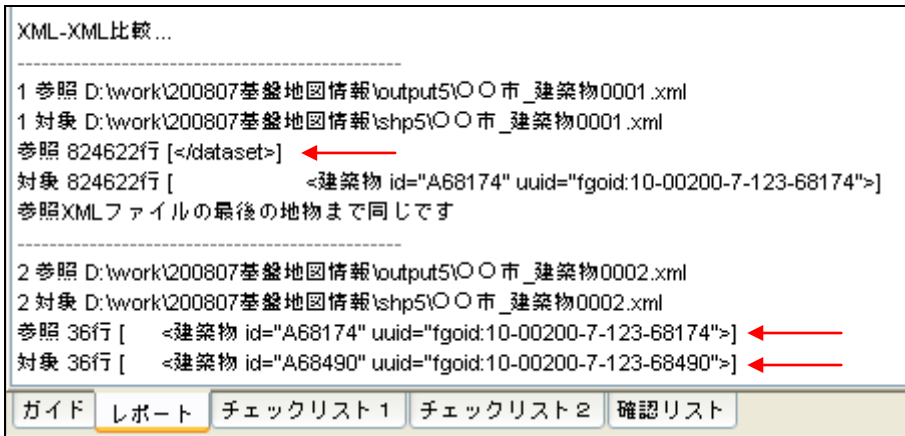
XML ファイルをシェープファイルに変換し、シェープファイルを編集し、再度 XML 戻すことを意図する場合、シェープファイルを編集する前に、一旦 XML ファイルへ戻してみることをお勧めします。メニュー「シェープファイルへ変換」ダイアログで指定する「GI」要素の内容などが、元の XML と異なっていないかを確認することができます。異なる場合、次のようなレポートが表示されます。この場合、ダイアログの指定を修正してください。



「proxy」の有無が異なっている場合、次のように[proxy]の行が異なるレポートになります。この場合、ダイアログの「要素[proxy]を出力する」を切り替えてください。



等高線や建築物のように、XML ファイルが複数に分割されている場合、メニュー[シェープファイルへ変換]では、一つのシェープファイルになります。メニュー[XML へ変換]で複数のファイルに分割される場合、ファイルに属する地物の数が異なると思われます。どこでファイルを分けるかは XML ファイルを作成するソフトウェアによって異なると思われますし、設定によってもことになってきます。従って、最初のファイル「0001.xml」はファイルの最後の行あたりで異なる行が現れます。地物が少ない方の XML ファイルのレポートに「</dataset>」が現れます。「</dataset>」は地物の終了を意味します。また次のファイル[0002.xml]以降では、最初の地物から「id」が異なります。



この比較ツールの目的は、要素「GI」と「exchangeMetaData」の内容の比較と、最初のいくらかの地物について、XML ファイルの記録方法が異なることがないかを調べるためです。実装ガイドで例示されている XML のスタイルを前提にしています。現段階では、メニュー[基盤地図情報 XML 作成]で作成した XML で動作確認しています。もし、異なるスタイルの XML がある場合、メニュー[XML へ変換]あるいは[XML-XML 比較]を改良することで対応していく予定です。